

ゴッホの ひまわり

saolipooh

芸術と科学や医学との境目が失われつつある昨今、最先端の前衛的アートシーンでは、先端科学技術や医療用機器が用いられた芸術作品がもてはやされているという。日本では、まだその手の芸術作品や作家が一般的ではないが、日本人でも、国内や海外で、そういった作品を発表する人がアンダーグラウンドの世界で活躍しているのだそうだ。そんななか、今月の初めから、これまでニューヨークに「ホスピタル」という工房を構え、海外の最先端アートの世界において活躍しているアーティスト、原西宗太が、六本木の美術館で個展を開くという情報を得て、芸術大学に通う私は、興味を示さずにはいられなかった。マスコミも、それまでは、あまり日本では有名ではなかった原西の存在を大きく取り上げた。原西は、女性受けのする整った目鼻立ちをし、スタンリー・キューブリックの代表作品の主人公のような、変わった服装をしていた。彼が、テレビのインタビューに答えていた言葉で、強烈に覚えていることがある。「私にとって、人間の皮膚や、唇や、腕といったものは、ゴッホにとってのひまわりのようなものです」

私は、さっそく、彼の個展を見に行った。実は、原西は医学部出身で、実際に病院で細胞や移植について研究し、医学に従事していたのだそうだが、個人的な興味はアートシーンへ向いてしまったので、ニューヨークで工房を構えることにしたのだという。彼の芸術作品は特殊で、移植用の皮膚や、電気仕掛けで動く人工臓器や、それらの写真にポップなアニメ風の絵を書き足したものであった。多くの人が物珍しさに訪れていたが、ほとんど、彼の趣味を理解できた者などいなかったのではないかと私は思った。よしんば、アーティスト原西宗太の嗜好を理解し、共感した人がいたとして、そんなやつは、何をしでかすか分からないから、早急に逮捕して、二度と獄中から外に出られないようにしたほうがいい。とにかく、私からしてみれば、異常としか思えないような作品群だった。原西が「アート界のマッドサイエンティスト」と呼ばれるわけが、はっきりと分かった。

それらの作品群のなかに、ひときわ目立つ作品があった。「本質」という題が与えられたその作品は、ガラスケースに入れられ、その下の台から白い照明が当てられている。それは、作家が細胞を培養させて、作り上げた本物の人間の腕だった。神経が電気系統に繋がられ、反応を起こし、その腕は、ぴくぴくと動く。まるで、生きた人間から、切り取ってきて、そのままガラスケースに仕舞ったような作品だった。私は、その作品にすっかり見入ってしまった。腕は、筋肉質で、脂肪が少なく、一般的な日本人の黄色い肌を持ち、男の人のものようだった。私は、その作品を長い間見ていた。気に入ったのか、と聞かれても、答えようがない。ただ、惹かれてしまった、としか言いようがない。

「本質」の隣のガラスケースには、「お隣さん」という題の作品があった。それは、移植用の人工皮膚で作った、透明の唇を敷いたその上に、ちょうど人の顔のように、くりくりとした丸い頬と目玉だけのロボットを配置した作品だった。目玉のロボットは、電線に繋がれていて、ぱちぱちとまばたきをしたり、黒目を動かして、見物人を逆に観察したりする。私が、「本質」を見ているときに、ふと、視線を感じると、その人工の唇を持った目玉のロボットが、私のほうを見て、じっとしていた。本来なら、まばたきを頻繁にするのに、なぜか、私を見るときは、まばたきもせずに、「見て」いた。私は、怖くなった。そして「本質」から、離れた。

しかし、その日以来、私は、あの腕を忘れることができなくなった。仕事をしたことのないのに筋肉質な腕は、どんな皺を刻んでいたっけ、爪は、どのようになっていた？色は、本当に黄色だったのだろうか、血管は、どのように走っていたか？どのように動いていたのか・・・あの腕を何度も心のなかに描きはするが、細部を思い出そうとしても、ちっとも思い出せないのだ。そうすると、もう一度、その姿を確かめたくなくなってしまふ。私は、その日から、ほとんど毎日、原西の個展に出かけていった。そのたびに、あの腕を何時間でも見て、その姿を目に焼きつけようとするのだが、離れてしまうと、またすぐに分からなくなってしまふ。そうして、ずっと頭からあの腕が忘れられずに、私はまた、その作品の前に行くのだ。

そんな私の姿をずっと見ていたのが、「お隣さん」だ。私が、食い入るように腕を見ている間、「お隣さん」は、私の心中を探るかのように、私へ黒い目を合わせ、視線を送る。

個展が終了する最後の日、私は、いてもたってもいられない気持ちになっていた。個展が終了すると、作品群は全て作家の工房「ホスピタル」のあるニューヨークに戻ってしまふ。国宝でもなんでもないので、需要があれば彼の作品は売られてしまふだろう。海外では人気の高い原西の作品だ。先日は、東欧の王子が10億で原西の作品を買ったという噂がでていた。美術館にいつまでも展示されるような種類の作品ではないため、もう二度と、あの腕に会うことはできないかもしれない。そう思うと、私は、気が狂いそうになった。まだ、あの皮膚の色や、その下の人工の骨の形、ぴくぴくという反応、血管の形態や色、電気系統に繋がれた切り口など、目に焼き付けていない部分がたくさんある。このままでは、私は、あの腕の姿を永遠に思い出せなくなってしまふのではないだろうか。そう想像したときの、私の胸の恐怖、虚無感は、耐えられないものだった。私は、あの腕と離れたくなかった。

私は、閉館後も美術館から出ずに、隠れていた。実は、その美術館の警備のアルバイトをしていたことのある私は、警備スタッフの動きは熟知していた。警備室に顔を出し、顔なじみに挨拶をし、時間を稼いで、帰るフリをして美術館内部にとどまった。トイレに隠れ、警備スタッフの目を盗んで、「本質」のある展示室へと足を踏み込んだ。もちろん、セキュリティカードを盗み、セキュリティ装置を一時的に外すことも徹底した。

電気が落とされていて、「お隣さん」は、目を見開いて、正面を向いている状態のままで、動かず、まばたきもしなかった。私は、暗闇のなか、ガラスケースに近づいた。台から当てられていた照明も今はついていなく、腕も電気が流されていなかったので、ぴくりとも動いていなかった。暗いので、色や細部がよく見えない。それでも、その腕の近くにおいて、必死に見ているだけで、私はそれでよかった。

しかし、いつまでもそうしているわけには、いかなかった。私は、その場を立ち去りがたく、途方に暮れた。もう一度会うことはできたのはいいが、どうすることもできなかった。この腕から離れることは、近い未来のことであった。私は、どうすればいいのか分からず、混乱していた。そして、こともあろうに「本質」の入っているガラスケースを叩いた。もちろん、壊れることはない。それでも、私はかまわず、ガラスケースを叩き続ける。ドンドン、という低い音が響くたびに、私の腕に痛みが走るが、すぐに忘れた。私はほとんど意識がなく、ガラスケースをドンドン、ドンドン、ドンドン、と叩いていた。なぜ、そんなことをしたのだろう。そんなことをす

れば、どうなるものか、すぐに分かりそうなものだろうに。しかし、私はそれをやめなかった。ドンドン、ドンドン、ドンドン・・・警報アラームが鳴り響き、騒ぐ音がした。足音がたくさんして、警備員が現れた。警備員が3人が私に向かって走ってきて、ガラスケースを叩き続ける私を制止しようとした。私は、警備員の1人が腰に差していた警棒を思わずひったくっていた。そして、思いきり、ガラスケースに叩きつけた。ドシャドシャ、という鈍い音がして、ガラスが砕け、作品の腕に、たくさんの細かいガラスが突き刺さった。そして、そのいくつかは、その腕の皮膚を貫き、血管を傷つけ、腕からは血液が溢れた。血に染められた腕を見て、私は、取り押さえられながら、大声で泣いていた。なぜ、こんなことをしたのだろう。どうして、分かりそうなものなのに。私は、後悔していた。

これが、今回の事件の概要です。

お

わり。